予知性の高いインプラント治療を行うためには、診査、診断を慎重に行い治療計画を立案するなど補綴学の知識が必要で、特にインプラント埋入位置は補綴物に合わせるために補綴主導で行われるべきである。しかし、解剖学的な理由により骨造成が必要なケースにしばしば遭遇する. 例えば、上顎全顎にわたるインプラント治療の場合、上顎洞底挙上術など侵襲の高い処置が必要となる場合もある。　近年、高齢社会になり、インプラント治療を希望される高齢者にも遭遇する。そのなかで、サージカルステントを用いて傾斜埋入を行い、上顎洞底挙上術を併用せずに上顎全顎インプラント治療を行ったケースを通してその臨床意義が高いことを経験した。また、ショートインプラントの使用も、侵襲の高い骨造成を避けるためには有効だと思われる。

今回は、骨造成を望まない患者に対しサージカルステントを用いてインプラントを傾斜埋入させることや、ショートインプラントを用いた症例を提示し、その利点・欠点について、ディスカッションしたい。